

のびやか



「支援を学ぶ」特集号

青い鳥医療福祉センター 指導課長 高井 富夫

私は昭和49年に障害児施設に勤めはじめました。それ以来、さまざまな施設でたくさん子どもたちやご本人さん、その親御さんたちと出会ってきました。私が学んだものは、すべてそれらの人たちとのかかわりによっています。人への援助の基本、支援者として

の基本をそこで学んだように思うのです。いま思い返すと恥ずかしいことばかりですが、そのエピソードを紹介しながら、そこで私が胸に刻んできたことをお伝えできたらと思います。

<第1話 カバンいっぱいのお菓子 ー目の前にいる人はー>

のびやか36号（H19年6月）掲載

暑い夏の日でした。施設に勤めはじめて2年目でした。私のグループには知的障害の重い自閉症の女の子、Aちゃんがありました。小学校低学年でしたが就学猶予で学校には行っていませんでした。ことばもなく、キーッと言いながら右の手のひらを見てくるくる回るのが好きでした。Aちゃんの家族は、行商しながら生活しているお母さんだけでした。今日は面会日です。何としても「あのこと」をお母さんに言わなければなりません。「あのこと」とは、面会日のたびにお母さんが大量の駄菓子をカバンいっぱいに詰めて来て、子どもたちの部屋でAちゃんにあげていることです。お菓子が畳にバラバラとこぼれ、他の子たちがそれに殺到します。お母さんはそれを避けながら、ニコニコ顔でAちゃんにお菓子を与えつづけます。職員はお母さんに話しかけようとするのですが、うまく避けられてしまうので取り付く島がありません。結局は、お菓子を拾っている他の子どもたちを部屋から連出すので精一杯だったのです。そういう面会日が続いていて職員たちは困り果て、私がお母さんにお話をするようになっていたのでした。

「お母さん、話があるのですけど」。私は思い切って話しかけました。お母さんは「すみません。すみません」と言いながら私を避けるようにして、Aちゃんの求めるままにお菓子を与えています。私は、少し声を大きくして「お母さん」と近づいた時です。お母さんが私に何度も頭を下げて「すみません、すみません。こうしてやるしかないのです」と

言って急に涙をボロボロとこぼしはじめたのです。私の声色や表情がお母さんをよほど咎めるものだったのでしょうか。はっと思って「お母さん、大きい声でごめんなさい。ちょっと話を聞かしてください」と声を落とした私に、お母さんは口早に言い訳を始めるのでした。行商が忙しくて何度も面会に来れないこと、いろいろしてあげたいのにできない自分が歯がゆいこと、施設に入所する前はAちゃんをおんぶして行商していたことなどなど、矢継ぎ早にされる話に圧倒されて、私の口は空いたままでした。何とか別の部屋で話を聞くまでには、カバンの中の大半のお菓子がなくなっていました。

イスに腰掛けて話を聞いてみると施設に入るまでのことや家で過ごしていた時のAちゃんの様子など、はじめて聞くことばかりでした。私はうなづいて聞くばかりで、「あのこと」の注意など宙に飛んでいました。お母さんの早口が遅くなり、トーンが落ちたのは一時間が過ぎてからでした。涙を流していた暗い表情のお母さんは、頭をもたげはにかんだ表情を見せていました。そのお母さんの顔を見て、私の中で恥ずかしさがこみ上げてきました。お母さんやAちゃんのことを何も知らない自分に気がついたからでした。お母さんがどんな思いでAちゃんを施設に入れざるをえなかったのか、お母さんらしいことをしてやりたくてもできない自分へのイライラ、面会が終わって帰るときの辛さ、どれをとっても私は何も考えていなかったのです。情けないことでした。私がお母さんにしようとしたことは、

「私たちが困っていることについてお母さんに何とかしてもらおう」ということに過ぎないのです。「相手のことを何にもわかったらんに」。それは、この出来事があってから私の心に大きく引っかかりました。

それ以来、いま私の<目の前にいる人は>、どんな気持ちでここにいるのか、今までどうしていたのか、これからどうしたいと思っているのか、それをその人から教えてもらってから、その人とかかわろうと考えるようになりました。

私は「あのこと」を結局、お母さんに向かって注意す

ることはできませんでした。それでも、Aちゃんのお母さんは私に会うとはにかんだ表情で頭を下げてくださいました。それに、Aちゃんにあげるお菓子も減り、他の子たちが殺到することもいつのまにかなくなりました。



<第2話 蒲団に書かれた名前 —母親から見えるもの—>

昭和50年当時、私が受け持っていたのは起居を共にする6人の男の子たちのグループでした。その頃は、生活用品の多くを複数の子どもたちが共用していました。さすがに歯ブラシや靴、衣服などは個人別になっていましたが、サイズの合わない靴をはいたり、先週ある子どもが着ていた服を今週は別の子どもが着ているということも実際にその数年前まではあったのです。今では考えられないことです。

Bくんは15歳をすぎた重い知的障害のある自閉症の子でした。ノッポの彼は、いつも自分の鼻の頭の前で短い紐を紙縊りのようにくるくる回しては、廊下を行ったり来たりしていました。彼は部屋の隅がいいのか、いつも窓際に寝ていました。しかし、窓際に他の子どもが先に寝てしまうと仕方がないので、彼はカーテンの陰に隠れて眠らずに深夜まで起きていることがよくありました。そして、蒲団が好きな彼は、部屋のみんがなくなると蒲団にほおおずりをして嬉々として寝そべっているのです。私にはいつも気になることがありました。彼の足が蒲団からはみ出ていることがよくあったのです。当時、蒲団はまだ共有の物品で、サイズは大と中しかありませんでした。ですから、昨夜Bくんが寝た蒲団を今夜は他の子どもが寝ているという状態で、小さい蒲団に身体の長い彼が寝ているということも当たり前だったのです。

ある日曜日、私はみんなの蒲団が新しくなったのを機に、それぞれの蒲団を決め、大きく名前を書いてしまいました。もちろんB君の蒲団はLサイズです。ひとつひとつの蒲団のサイズを確認しながら、蒲団を敷くのが実際には面倒だったのです。まったくの思いつきで、もちろん上司にも無断でしたが、それも特に気に留めませんでした。

その月の面会日でした。Bくんのお母さんがにこやかな顔で私に頭をさげて「先生、本当にありがとうございました」と言うのです。ぼかんとして「ええっ」と私が返すと、「蒲団に名前を書いてくださって、ありがとうございます。これでBの蒲団を直してやるこ

とができます」と再び頭をさげて、微笑んでいます。

「あ、いえ。勝手に名前なんか書いちゃって。すみません」とまだ分からない私。「いえね。先生が名前を書いてくださったので、私がこれからBの蒲団を洗ったり、直してやれるんです。ありがたいことです」と言うお母さんのことばを聞いて、私ははじめて合点がきました。そして、さーっと冷や汗が出てくるのが分かりました。

お母さんは、きっと夜眠る時、息子はちゃんと寝ているだろうか、気持ちがいい蒲団で寝ているのだろうか、寒くはないだろうかと心配しているのでしょうか。手の届かないところで暮らしている息子を想う気持ちが、いまさらながら伝わってきました。自分が洗った蒲団カバーに寝かせてあげられたら、親としてどんなにホッとすることでしょう。今まで、お母さんがそういう気持ちで面会に来られていたことに、まったく気がついていない私でした。私が学生の頃、同じように母親が心配してくれていたことを思い出しました。いちいちうるさいこととしか感じなかったあの頃。親の心が分からないまま、ここまで来てしまった自分が情けなくもありました。その深い親心と同時に、蒲団に名前を書くという行為の意味が、職員と母親ではこんなに違うということを改めて考えさせられたのです。それ以来、<同じことでも違う立場からはどんなふうに見えるのか、どんな意味になるのか>を考えるようになった訳ですが、これも援助の基本だと気がついたのです。

Bくんは18歳になると遠くの成人施設に変わっていきました。Bくんがその施設でとてもいい表情で暮らしていると施設の仲間から聞きました。きっと、お母さんもいい表情で面会されていたことでしょう。



Cくんが施設にお母さんとやって来たのはある年の春のことでした。玄関の前のおおきな枝垂桜が咲きはじめていました。知的障害者更生施設には当時150人の人たちがさまざまな事情で家庭や地域から離れて暮らしていました。養護学校を卒業したCくんも、単親のお母さんが働かざるを得ないという事情をかかえていました。それに80kgもある巨体で昼夜を問わず無断外出を頻繁に繰り返していたため、お母さんは疲れきっていたのです。

Cくんはお母さんと車から降りてきました。たくさんの荷物を車から降ろしているのをCくんはニコニコと見ています。玄関に荷物を置いて、お母さんと私が事務所でしばらく話をしている間に、そばにいる彼は神妙な顔つきになってきました。お母さんも本当に彼を置いて帰れるのだろうか不安になってきたようでした。話が終わって、お母さんが車に乗り込むとCくんも乗ろうとします。それを私が止めます。お母さんが思い切って車を出すとCくんは顔を真っ赤にしてウーッと叫んで車につかみかかります。職員が数人で彼を押しとどめると彼はドカッとその場に座り、車が去った方を見つめています。不安をいっばいにためた目でした。

彼が施設の玄関を再び入ったのは、それから3時間後でした。彼に荷物を渡してから、私はそのまま3時間、ずっと彼のそばにただ座っていました。夕暮れになってさらに不安になったのか、うつむいて私に身体をくっつけてきました。私が立ち上がってゆっくり誘うと荷物をしっかり抱えてついてきたのです。棟のホールに入って長イスに腰掛けても身体を硬くして、差し出された食事にも手をつけようとしませんでした。そして蒲団をしいて促しても寝ようとはせず、明け方まで長イスでウトウトして過ごしていました。彼が自分の部屋に入ったのは、その3日後でした。

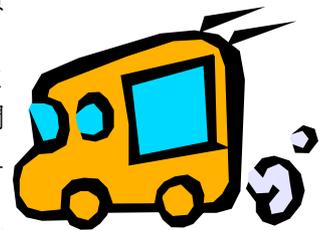
彼が入所して職員が一番困ったのは入浴時間でした。ある時から、頑として服を脱ごうとしなくなったからです。その訳を調べてみると、脱いだ服が洗濯のために施設のランドリー部へ渡り、彼の目の前から消えてしまったからだと分かりました。彼は3日3晩、家からもってきた荷物を手放さなかったぐらいですから、そのショックは相当なものだったと想像できます。

当時、彼のことは四つありました。「ひー (家で飼っているウサギ)」「かーやん (お母さん)」「ぶー (車)」「ぼっぼ (大好きな電車)」です。一つのことをいろいろな意味で使うので、それで40語ぐらいにはなりました。服のことを「かーやん」と言うのは、「お母さんが直してくれる服」や「お母さんが洗濯機で洗っ

てくれる服」という意味です。これにやっとながら気がついた私は、彼が持ってきた荷物のすべてが、彼の生活の中で意味付けられ、四つのことばで表現されていることに改めて気がつくことになったのです。服は、自分のそばに今はいないくお母さんと自分をつないでいる大切なもの>だったのです。それがなくなることは、お母さんがいなくなることだったのでしょうか。彼のそんな気持ちに気がついたとき、ボロボロになっても汚くなっても、それが彼にとってかけがえのないものであれば、彼がしているのと同じように大事にしようという気持ちを周りの私たちが強く持ってかかわることになったのです。ですから、汚い服があっても彼に無断では洗濯をしないようにしましたし、施設のランドリー部ではなく彼に見えるように施設の洗濯機で洗うようにもしました。半年後には、ダンスの中の彼の汚い服を見つけても「かーやんが今度洗ってくれるよね」と素直に大事にしまえるようになった私に、彼は自分の服を預けてくれるようになったのです。

Cくんとのかかわりは、その人にとってかけがえのない物や事柄があること、そしてそれぞれに理由や経過があること、これを感じながら相手とつきあうことの楽しさを味わうとともに、支援のあり方を教えられたのです。

ところで、Cくんの無断外出はそれから2年ほど続きました。職員の隙を見てはバス停に走ります。バスに乗れば家に帰れると思うのでしょうか。しかし、身体が重い彼はいつも途中で職員に追いつかれてしまいます。すると、今度は座り込みます。ある時、座り込んだと聞かされていつものように迎えに行きました。彼と同じように道端に座って彼が動き出すのを1時間ほど待っていました。私は施設にやりかけた仕事を残してきたこともあってイライラしていたのでしょうか、迷いもありました。うつむいていた私の顔をニーツという笑顔で彼が覗き込みました。私も思わずニーツと笑顔で返しました。「これでいいんだ」。そのとき、仕事にこだわっていた自分の心がフッと軽くなるのを感じました。彼は私の心を見透かしていたのでしょうか。そして私のことを心配したのでしょうか。それから二人はニコニコしながら手をつないで夕暮れの道を施設へと帰りました。「一本取られました」。そのときの彼はまるで禅寺のお師家さんのようでした。



<第4話 野良猫を捨てに行く ー葛藤は葛藤のままにー>

今にも雨が降りそうな日でした。私は、Dくんを車に乗せて、峠を越え田んぼの広がる田舎道を走っていました。人家がまばらにある畑の草むらに車をとめて、籠に入った猫をDくんは道端にそっと降ろしました。籠から出たその猫は一旦、緊張してあたりを見回すとそろそろと草むらに近寄り、今度は私たちのほうをじっと見えています。二人は、施設から車で1時間かけてその猫を捨てに来たのでした。

どうしてそんなことになったのか、それをこれからお話します。実は、知的障害者更生施設で暮らす彼は一匹のオス猫を飼っていました。とても頭のいい猫でしたから施設に迷惑をかけるようなことはほとんどしませんでした。しかし、時おり野良猫がやってきては施設の残飯をあさったりすることがあり、その疑いをよく飼い猫にかけられました。飼い主としては自分の猫があらぬ疑いをかけられることに腹も立つけど、疑われないようにもしなければならぬ、というのが彼の考えでした。相談された私は、野良猫を捕まえないはめになり、苦心して捕まえたのです。ところが保健所では引き取ってくれないことが分かって、結局、峠を越えてここに捨てに来たのです。

Dくんは、食欲のコントロールができません。それは、彼の我慢が足りないわけではなく、もともと持って生まれたものなのです。小さい頃から、それを周囲になかなか分かってもらえないまま生きてきました。しかも、小さい頃に別れ別れになっている彼の両親は未だに行方不明です。「迷惑をかけて」というたくさんしたことばの中で彼はひとりで生きてきたのでしょう。ここでもまた、自分の飼い猫が「迷惑をかけて」と言われることには敏感に反応せざるを得なかったのだと私には思えたのです。

猫を捨てに行く彼は沈んでいました。それが飼い猫

ではなく、野良猫であることが問題なのではなく、「捨てる」ということが重いのだと感じました。捕まえない方がよかったのだろうか。捕まえてしまうとその野良猫を何とかしないといけなくなります。そのことはまた、彼を苦しめるのです。<傷つけられたくない思いと傷つけない思いの間で揺れ動く>彼に、何もできないでいる自分がいました。彼が両親から受けた傷と彼が他人に与えた傷を、そこに重ねてしまう自分を私は止めることができませんでした。Dくんのその葛藤を肩代わりできるはずもなく、慰めることも励ますこともできずに、そこにいることしかできません。そして、その葛藤の行先を見届けることしかできませんでした。

そばにいることしかできないなら、そのできることを今はしよう、というのが当時の私の結論でした。相手の中で起こっている葛藤をびんびん感じながら、それでもそばに居よう。彼が解決するしか仕方のないことなのですが、そばに居続ければいつか役に立てるかも知れない、いや役に立てなくてもいいからそばにいたいという気持ちが湧いていたのです。役に立たなくてもそばにいること、それは支援の基本のひとつとして、今でも大切だと考えています。

二人をじっと見ている野良猫を置き去りにして帰る車の中では、Dくんはまだ不安げな表情でした。今日は何を食べるのだろうか。考えても考えても止まないことが施設に着くまで続いていたようです。帰ってきた二人を見つけて、彼の飼い猫が施設の花壇から跳んできました。鳴いて甘えてDくんを擦り寄っている猫の頭を彼は静かに無言でなぞっていました。



<第5話 私に触ると火傷をするよ ー判断ではなく決断をー>

のびやか38号 (H19年12月) 掲載

E子と私は二人で畑の土を起こしていました。「鍬の持ち方が少し上手になったな」と私が誉めると「先生、わたし最近、変わったよ」とE子が答えました。そのE子の目はかつてのようなく私に触ると火傷をするよ>というものではなくなっていました。ここは教護院（現在は、児童自立支援施設）です。非行の恐れのある子どもたちが教育や訓練を受けて、通常の生活に戻るための力をつける施設です。E子は、1週間、無断で施設を抜け出して街をぶらつき、警察に補導さ

れて施設に帰えされてきたのでした。再び街で遊びたい気持ちを鎮めて落ち着いた生活を取り戻すために、当分は学校に登校せず、私と共に作業していたのです。

「ふーん。どんなふう」。私はてっきりE子がこれまでの行いを反省して、これからの自分をしっかり考えてみたのかなと思い、少し微笑んで顔あげました。E子はうつむいたまま「私ね。どんどん悪くなってる。前はこんなワルじゃなかったよ」。その予想外のことばに、私は思わず息が止まりました。「どうし

てそう思う」と低い声で尋ねる私に、「だって、ここにいと人の裏側のこと考えるじゃない。ああ言うけど本当は違うんじゃないか、とか。疑ってかかるっていうか。そういうことって、今までの私になかったもの」という返事がかえってきました。しかも、まじめな顔を向けています。いままで自分の思うとおりに行動してきたE子にとって、ここの生活では<他人の気持ち>を無視できなくなったらしい。私はそういう気持ちになっているE子に改めて感心し、「そうか、それはよかったね。他人の気持ちを分かるなんて、随分進歩したんじゃないか。悪い子になったわけじゃないよ。それでいいんだよ」と返しました。E子は「ふーん」と言って、また鍬を振りはじめました。

進まない授業に手を焼き、無断外出や生徒同士のトラブルに手を焼きながら、教護院に来て3年目でした。生徒たち一人ひとりの境遇は、私が触れたこともない世界でした。親子の関係も学校でも近所でも悲惨としか言いようのない世界を生きてきている子どもたちが多かったのです。そのE子も親からは見離され、帰るところがありませんでした。何も怖くはない、自分が思うままに、自分の体を張って生きている、という感じでした。子どもたちに触っているだけで本当に心が火傷をしてしまう、そんな感じでした。私は、どうしたらこの子たちが社会性を身につけ、学習し、独り立ちしていけるのかを考える一方で、E子をはじめとする生徒たちのルール違反に具体的にどう対処すべきなのかを考える毎日でした。誰に聞いてもどの本を調べても、私を導いてくれる指針は見つかりませんでした。

悩みぬいている時に、一つの出来事がありました。それは1学期の終わり近くのことでした。数学の授業が始まる前にいつものようにE子が「先生。何で勉強

しなきゃいかんの。やらんでもいいじゃん。どうせ使わないもん、数学なんか。バスケしようよ。隣の教室はさあ、バスケやってるじゃん」と甘ったれた声で言い始めたのです。私は「今日もバスケはしません。数学をやります」と普通に、きっちりと伝えました。すると、E子は「えー。つまんないの」といいながら、教科書を出して開いたのです。E子が1回で諦めて応じたのは初めてでした。私はそのとき、はっとしました。そうか、これだ、私に迷いがいいこと、これだと思ったのです。つまり、「私がAと言ったときに、生徒がBだと言ったらどうしよう」と先のことを心配しながら言うことばと、「今は今。その後に起こることはそのときに考えて言えばいい」という気持ちで言うことばとは大違いだということに気がついたのです。私がこれまでいろんな人に尋ねたり、多くの本を読んできたのは「どのような判断がいいのか」ということでした。しかし、私が求めていたのは実は「私の決断」だったのです。生徒たちは私の言うことが正しいから従うのではなく、私の心が動かないから生徒たちの心が定まり従うのだ。そう感じたのです。その場その場で生じている事実きちんと向き合える<決断>は、支援の姿勢を維持していくうえで欠かせないことだと今でも感じています。

その後、E子はいろんな問題を起こしながら卒業を迎え、施設を退所しました。問題を抱えたまま生きるには、まだまだ弱い子どもだったのでしょう。退所してからも、ある熱心な職員の援助を受けて看護師になったと聞いています。私の洋服ダンスには、彼女が当時、編んでくれた黒いマフラーがかかっています。毎年、冬になると一度は首に巻いてみえています。



<第6話 小さな砂の山 ー何もしないということー>

福祉の世界に入って7年が過ぎようとしていました。いろんな子どもたちに出会い、また療育の手がかりが掴めそうな時期でもありました。そんな時にFくんに出会いました。プレイルームの一角にある砂場に座って、Fくんが柔らかな表情を見せています。足元には滑らかな小さな砂山が築かれていて、時おり窓から差す午前日の陽射しにキラキラしています。Fくんがお母さんと短期母子療育施設・緑の家にやって来てから4日目の出来事でした。私はFくんのそばで同じように砂山を作りながら、ゆったりした気分緑の家での彼とのかかわりと数年前の出来事とを振り返っていました。

緊張と不安で瞬きもできないほどに鋭くなってしまった眼を正面の壁に向けたまま、プレイルームの隅にジッと座ったまま動けなかったFくん。このプ

レイルームへ私と手をつないで歩いてくる間に緊張のあまり手に汗をたくさんかいていたFくん。プレイルームに入るや否や私の手をさっと放して部屋のコーナーに陣取ったFくん。この彼に私は何をすればいいのだろう。私が誘えば、その鷹のような眼と固い身体で私に依じて行動できることは手をつないで歩いてきたことで分かっていました。針の筵にいらるようなFくんには私はなすすべもなく、Fくんの邪魔にならないよう近くに座りつづけることにしました。そこでふと、彼が何か助けを求める素振りがない限りは「何もしないこと」を試みようと思ったのです。

緑の家は、親子8組が一週間ほど家庭や地域から離れて合宿生活をしながら、日頃悩んでいる子育てについての解決の糸口を見つけあうところでした。F

くんの担当になった私は、毎日午前と午後、手をつないで700mほど離れたプレイルームまで歩いて出かけ、そこで遊んではお母さんの待つ緑の家に帰るといふプログラムを繰り返していました。彼と一緒にいる間「何もしないこと」は想像以上に苦しく、Fくんを感じることに自分の中に起っては消えていく気持ちと向き合うことを強いました。このことは4年前のある出来事を思い出させることとなりました。その頃、知的障害児施設にいた私はこの福祉の仕事の辞める決意をしていました。「結局、この仕事は自分には向いていないのではないか」「自分は何も役に立てないのではないか」、その気持ちを動かしようもなく、「また一から出直そう」と次の仕事を探し始めていました。自分なりに一生懸命にやってきたつもりでしたが、自分の意図は子どもたちには通じませんし、その前で立ち往生している自分を見るのも嫌だったのです。「他にもっとやることがあるんじゃないか」。そんな思いを突然、打ち消す出来事が起りました。施設内で赤痢患者が発生したのです。すぐに施設全体が隔離となり、子どもたちは一歩も外に出られない状態になりました。全職員が一丸となって目の前のことにあたることになり、施設を辞めるとは言い出せなくなりました。そして半年の間、消毒の臭いのする中で子どもたちの世話をすることに明け暮れることになったのです。しかし、私にとってはその期間が、子どもたちに対して自分が何をどうしようとしていたか考える機会となり、あまりにも一方的な自分のかかわりへの反省をもたらすことになりました。隔離されて色白くひ弱になった子どもたちが欲していたのは、教育でも療育でもなく、ただのんびりと外を歩きたいということでした。そのことは半年の隔離生活を一緒に終えた私には痛いほどよく分かりました。そして同時に、いままで子どもたちの言い分を何も聞いていなかった自分を深く恥じました。教育するとか療育するという大義名分のもとに子どもたちを自分が描く姿へコントロールしようとしていた自分、そして身

辺処理を身につけさせて自立させることが社会復帰だとしていた自分がただのことだと気付かされたのです。人間をコントロールしようとする気持ち、コントロールできるはずという考え、この傲慢さの根っこが自分の中に見えたのでした。そして、このまま仕事を辞めるわけにはいかなかったのです。

緑の家の初日のFくんは、他の子どもが接近すると陣取ったコーナーから意を決してさっと別のコーナーに走り、くるっと向き直って前と同じ姿勢で身を固くしています。こうしながら必死に自分を守っているように私には見えました。しかし3日目には、そばにいる私を受け入れたのかチラッチラッと見るようになりました。その視線は「トイレに行きたい」と訴えるようなものになっていました。そして、その彼が始めて自分から動いて行ったのが4日目の砂場なのでした。砂場のふちに腰掛けてしばらく砂を手で触っていましたが、そのうち両手で山を作り始めたのです。彼の小さな両手に入ってしまうぐらいの小さい小さい山でしたが、その山をじっと見つめている眼の光は柔らかかったです。「したいことが見つかって、よかったね」。つぶやいた私に初めて和やかな笑みをそっと返してくれました。



私たちが子どもたちや障害のある人たちに介助や世話、そして何かを教え、伝える時に、知らず知らずに相手に自分に合わせ、意のままにコントロールしようとしてしまいがちです。相手をコントロールすることの気持ち良さが私たちの眼や耳を塞いでしまいます。「何もしないこと」はその<コントロール>から距離を取ることで、結果的に眼と耳を働かせたのです。<コントロール>と<支援>とは対極にあるものだと思いますが、仕事を辞めようとしてから3年後、少し支援の姿勢が分かりかけたときの出来事でした。

<第7話 投げ返されたカッターナイフ -ネガティブな自分でもいい->

のびやか39号（H20年3月）掲載

今は亡きG夫と私が教室で睨み合ったのは、教護院（児童自立支援施設）の新学期が始まってまもなくでした。G夫は前々年に教護院内での義務教育を終えてある企業に就職したのですが、そこでトラブルを起こし、再び教護院に舞い戻ってきていました。新たな職を見つけるまでの間、中学3年生のクラスで勉強することになっていたのです。トラブルの発端は何でもありませんでした。G夫が私のカッターナイフを無断で使い、私の目の前で無造作にポンと教卓に投げ返したのです。それがカタンと床に落ち、G夫もそれに気がついていないはずでした。「拾って返せよ」私はすかさず

G夫に言いました。G夫は椅子にふんぞり返り、フンという目つきで「危ないからわざわざ古い画鋸を取ってやったんじゃないか。ありがたく思えよ」と凄んでいます。「拾って俺に返せと言ってるんだ」。私も引っ込んではいません。G夫は立ち上がるなり、窓の外にペッと唾を吐き「やんのか、てめー。えー。やったろうじゃないか」と私の前に立ちはだかります。二人はそこで睨み合っていたのです。そのとき、私には去年の苦い思い出が蘇ってきました。着任早々、私は国語の授業中に胸ぐらを掴んで向かってきた中3の生徒を投げ飛ばし、職員室まで引き

ずっていったことがありました。私の指示に反抗して教科書を読もうとしないばかりか、罵声を浴びせて掴みかかってきたその生徒は、気力を無くしていました。職員室まで連れて行ったのは、その後どうしているか私には分からなかったからでした。「またか。行くところまで行くしかないのか。このばか野郎が」。声にこそ出ませんが、私の頭の中は煮えたぎっていました。



次の瞬間、「やっだろうということじゃない」。意外と落ち着いた低い声でした。「俺のナイフを俺に返せと言ってるだけだ。俺が間違っただけか」。立ったままG夫は私を見据え黙っています。私もG夫を見据えたまま動かないでいます。数十秒の後、ふっとG夫がカッターナイフを拾って教卓にバンと叩きつけ「拾やいいんだろ、拾や。」と吐き捨てるように言うと面倒くさそうに席に着きました。G夫の坊主頭には無数の傷跡があります。小さい頃、父親から虐待を受けていたのです。時に大人に反撃しては無気力な態度に戻っていく彼に、応対する者は自分の中のネガティブな感情を嫌というほど味わうことになるのです。「はい。それじゃ、授業を始める」。私は何事もなかったように生徒たちに教科書を開かせ授業を始めたのでした。

頭から大人を信用していない生徒たちとの付き合いは、G夫に限らず私をして「自分はこんな嫌な人間だったんだ」と思い知らされる場面ばかりでした。生徒からは「悪く」思われる人間ですし、生徒を「この野郎」と思ってしまう人間ですし、怒ったり、憎んだり、動揺したり、疑ったり、ありとあらゆる否定的感情にまみれていく毎日でした。この時期、私は自分の中の否定的感情を何とかしなくてはと焦っていました。このままでは、本当に自分は大めになってしまうのではないかと考えていたからです。授業で冷静に振

舞えば振舞うほど、ささくれ立ってくる自分の心を持って余すようになったのです。「どうせ自分なんか何の役にも立たないのではないか」。生徒たちと同じ穴に落ち込んでたため息をつく毎日でした。唯一の解消法は退勤の車の中で音楽を聴くことでした。滑らかになっていく心をまざまざと感じました。しかし、ネガティブな心への対処法はどんな専門書にも書いてありませんでしたし、先輩からのアドバイスもありませんでした。仕方なく、私はあの教室での場面のように、<カッカと来る感情>とその感情がサーッと<去った後の冷静さ>をしばらくの間、続ける他ありませんでした。ある時、私が尊敬している先生から「感情はそのままにしておけば消えていくもんだよ」という言葉を聴き、はっとしました。その言葉で否定的感情を理屈（理性）で整理しコントロールしようとしていた自分に気がついたのです。冷静な自分こそが本物の自分であるかのように、また正しい自分であるかのように思っていたのです。気がついてみれば、どちらの自分が正しいのか、正しくないのかということではありません。どちらもそのまま自分です。どんなにネガティブな感情が湧きあがってきてもいずれは消えていきます。それは自分の力ではなくて、人間がもともと持っている性質でしょう。ネガティブさも自分のうちと思えるようになったとき、それに囚われないでいる自分を感じたのでした。いま考えると自分のネガティブさに拘らなくなって、相手のネガティブさにも向き合えるようになった気がするのです。それは支援する者の側にある大きな課題だと思います。

「ねえ。先生。これやってもいいでしょう」とゲーム機を持って甘えた声を出していたG夫ももういません。退所してある駅前でたこ焼き屋の手伝いをしていたのですが、ある日、ビルから飛び降りて死んでしまいました。彼を思い出したたびに、もっとまじなかわりがあったのではないかと悔やんでいます。

<第8話 ススキに託されたことば ー必要とされていることー>

3歳のHくんと手をつないで帰ってくると、お母さんが玄関の前で両手を広げて「おかえりー」と待ち受けています。Hくんは左の手で、ビニール袋をしっかりと握っています。その袋にはHくんが散歩の道すがらに摘んできたススキがいっぱい入っていて、揺れています。お母さんを見つけた彼は、私の手をにぎったまま足早に歩き始めました。そして、お母さんの前に来ると、袋を見せて何か一方的に話しかけています。お母さんは、広げた両手を所在無く下げて彼の話に相槌を打っています。Hくんはたどたどしく、しかし、一生懸命に、私と遊んだことやススキがあったことを伝えています。Hくんの輝いている目とは反対にお母さんの目が沈んでいるの

が気になります。

これは私が短期母子療育施設・緑の家に行ったときのことです。緑の家は、親子8組が一週間ほど家庭や地域から離れて合宿生活をしながら、日頃悩んでいる子育てについての解決の糸口を見つけあうところです。Hくんとお母さんは、他の7組の親子と一緒にここで生活していたのです。Hくんの担当になった私は、毎日、手をつないで700mほど離れたプレイルーム（ドラえもんの家）まで歩いて出かけ、そこで遊んだ後、お母さんの待つ緑の家に帰るというプログラムの中で過ごしていました。お母さんが遠く緑の家までやってきたのは、Hくんとお母さんとの「母子関係ができていないのではな

いか」と通っていた療育施設の職員から言われたことが気になっていたからでした。「分かれるときに泣かないし、再会する時も抱きついてこないし。やっぱり、母子関係ができてないからでしょうか」と私に問いかけるお母さんの目は真剣でした。その裏には、自分の母親としての努力が足りないのではないかと、工夫が足りないのではないかとという自分を責める気持ちがいっぱいあったようでした。初日から気の合った私とHくんは、手をつないでニコニコとお母さんに手を振ってプレイルームへ出かけました。そういうことが実はお母さんの心配をさらに煽ったようでした。そんなこととは知らない二人は、プレイルームで遊んだ帰りにはお母さんへのお土産として道すがらの「ススキ」を取ってきたのでした。Hくんのお母さんに対する気持ちはとても豊かなことを感じていた私は、プレイルームでの様子を伝えました。お母さんはその報告を聞いてもまだ胸のつかえは降りないようでした。それだけ、お母さんには打てば響くような手ごたえがなかったのでしょうか。私はお母さんを説得するのはやめて、流れるままに二人で仲良くプレイルームに出かけ、帰りにはいつもススキを取って帰ってきました。いつもニコニコといい顔でした。

お母さんは、Hくんが本当に自分を必要としているのか、ずっとずっと考え込んでいました。明日は家に帰るという4日目の夜のことでした。お母さんは隣で寝ているHくん「明日、お昼ご飯を食べたらパパのいる家に帰るよ」と告げました。すると、Hくんは起き上がって枕もとに置いてあったススキを手にして「おとうさんに、あげようね」とお母さんを見つめてやさしく言ったそうです。お母さんはそのとき初めて、Hくんが私たち親のことを大事に思っていたことがジーンと伝わってきたそうです。「この子はこんなに素直に言ってくれてたのに、自分は何にこだわっていたのだろう」。お母さんは涙を流しながら話してくれました。

きっとお母さんは手ごたえを感じないもやもやとした頼りない気持ちを「必要とされている」という表現形（例えば、再会時に抱きついてくるとか）で明確に立て直したかったのでしょうか。＜人から必要とされていること、大切に思われていること＞は、この世にうまれた誰もにとっても生きるうえでもっとも大切な原動力ではないでしょうか。子どもがそれを感じ、親もそれを感じている。感じていることなのに、気がつかないでいる。それを見つけることへの支援は、二人の

関係を大切にしたいという思いを基にした、あらゆる支援の根本だと思っています。

その年の年賀状には、ディズニールランドでの3人の笑顔が映っていました。お父さんとお母さんの真ん中で得意げな笑顔のHくんがいました。

* * *

思いつくままに8話にわたって、障害のある本人、教護院の生徒、親御さんとの日常の交流から教えられた様々なことを振り返ってきました。

ここに、もう一度お話しを整理してみます。①目の前にいる人はさまざまな経過があつてここにおり、そこに生活という営みが確かにあるということ、②違った立場で物事を見るとそこには様々な気持ちが込められてあり、そこに見えるものが真実であるということ、③奇異に見える行為でもそれぞれに理由があり、その人にとってかけがえのないものがあるということ、④その人が抱えている問題をその人に代わって解決することはできないけれども、その人のそばにいることは、その人を見捨てないことであり、自分をも諦めないことであるということ、⑤冷静な正しい判断というものだけが人の役に立つわけではなく、人の魂を鎮めるのは、自分の揺れ動く魂を鎮める自分自身の決断であろうこと、⑥人間が人間を意のままにコントロールすることはできないし、またするものでもない。コントロールすることの気持ちのよさに眼や耳を塞がれては支援とはほど遠いものになってしまうということ、⑦自分の中にあるネガティブな気持ちも自分のものであることに変わりがなく、それはそれでいいということ、⑧自分がかけがえのない存在として人から大切に思われていること、必要とされていること、それを感じながらいられること、それは生きる源としてお互い様であるということ、でした。

支援者としては、＜相手の土俵でかかわること＞、＜相手に向けられたニュートラルな関心＞、そして＜ささやかな自己肯定感＞。この三つの教えが基本とされている私です。求められるままに綴ってきましたが、目の前にいる人との日常の交流から教えを受けているのは、今も同じです。そして、学んだことはまたどこかにお返ししていくことになるのだと思っています。長い間、おつきあいいただきありがとうございました。

（なお、ここでお話しました登場人物等は本意を壊さない範囲で変更を加えました。）

（おわり）



〒452-0822 愛知県名古屋市西区中小田井5丁目8番地
 電話 052(501)4079
 Fax 052(501)4085
 Email aitoribk9.so-net.ne.jp